

(2008. 07. 7)

外国人散在地域における外国籍年少者支援の枠組み構築のために

子どもラサ活動報告

深澤のぞみ (金沢大学 人間社会学域国際学類日本・日本語教育コース),
山崎けい子 (富山大学 人文学部),
中河和子 (トヤマヤポニカ), 田上栄子 (トヤマヤポニカ)

1. はじめに

筆者らは、外国人散在（非集住）地域での外国籍年少者の学習環境創出を目指し、実践的な活動とともに、調査研究を行っている。2007年からは、子どもラーニングサポート北陸（愛称：子どもラサ）を組織して、講演会の実施、ウェブサイトでの情報発信や、外国籍年少者の母語による翻訳教材の作成などに取り組んできている¹⁾。

本報告は、筆者らが活動する富山県の外国人の状況を分析した上で、富山県の特徴に適合した実践活動を模索し、実際の活動を分析・検討した内容をまとめたものである。この「子どもラサ活動報告」を発信することで、より多くのつながりやフィードバックを得たいと考えている。kodomotoiawase@yahoo.co.jpに感想やコメントなどをお寄せいただけたら幸いに思う。

(文責：深澤)

2. 活動の背景

2.1 問題の所在

日本に居住する外国人は年々増加し、また定住化の傾向があると言われている。それに伴い外国にルーツを持つ年少者²⁾（以下、外国籍年少者と略）で中長期の滞在をする人数も増加している。年少者は成長途上の存在であり、国籍を問わず、教育を受けて一人の人間として自立ができるようにならなければならない（石井2006）。しかし、外国籍年少者が日本で教育を受けようとする場合、日本語の学習が必要なのは言うまでもないが、教育制度や学校文化にも違いがあるため、慣れるまでに時間がかかったり、いじめに遭ったりするなど、さまざまな困難がある。さらに、親の仕事の都合などで帰国したり、あるいは母国と日本の行き来を繰り返したりするため、教育が途切れてしまうこともある。外国籍年少者が必要な教育を受け続けていくためには、まず外国籍年少者の学習環境を整えることが重要なのである。

このような外国籍年少者には、学校の中での指導や支援だけでは十分とは言えず、各地で様々な支援活動が行われている。だが外国籍年少者の問題は、地域によっても状況に大きい差があり、大規模集住地区がある大都市圏や愛知県、群馬県などでの先進的な事例がそのまま適用できないことも多い。筆者らの居住する富山県には、後述する通り、大規模な集住地区はないが、それほど少なくない外国人が、広域に点在しているのが特徴である。そこで、筆者らは、外国人が集住していない地域を「散在地域」と位置付け、散在地域の特徴を踏まえた上で、外国籍年少者の学習環境を創出するために求められる支援の内容を検討した。

(文責：深澤)

2.2 外国人散在（非集住）地域

2.1 でも述べたが、これまでに行われてきた外国人年少者に対する支援活動は、大規模な集住地区がある場所が中心である。ところが、筆者らの居住する富山県には、突出した集住地区がなく、さらに、支援者も広い範囲に点在しているという特徴がある。このことについて、詳しく述べる。

まず、富山県における外国人登録者数は14,891人で、県の全人口の約1.3%を占めている（2006年12月）。全国平均は約1.6%であるから、これよりはやや低めだが、前年度比の増加率が全国的にも高く、最近の増加が著しい。また、日系ブラジル人やその配偶者などの工場労働者が多いこと、中国人・フィリピン人配偶者などが多いことが特徴で、これは、中・長期の滞在をする定住外国人が多いことを意味している。

次に、外国人児童生徒に関しては、小学校、中学校、高等学校での在籍数は380人（2006年5月）で、このうち、日本語指導が必要な児童生徒は276人（小学校224人、中学校52人）（2006年9月）と発表されている。これは、全国47都道府県中18位であり、近隣の石川県の73人、福井県の98人と比較すると、人口に比して多いことも特徴といえることができる。

富山県での外国籍年少者への支援は、学校での外国人児童生徒支援講師（非常勤）や加配教員によるもの、さらには地域のボランティアなどによるものが主である。上述したように、富山県は全体的には外国人数、そして外国籍年少者が少なくない県だが、外国籍年少者は広域に散らばって在籍していることが多いため、各校に数名ずつであることがほとんどである。このように外国籍年少者が散在している地域では、問題が狭い範囲のみで対処されたり、少人数のため問題が「ないこと」にされるなどで、外国籍年少者の抱える問題は顕在化しにくい。これは、地域の日本人住民や学校そして行政の間で、その問題が共有されにくいことでもあり、支援をするための人材やノウハウもなかなか育たない。

外国人集住地区での問題解決のために、全国で様々な試みがなされるようになってきているが、これからは、富山県のような「散在地域」でこそ外国籍年少者の支援の枠組みの提示が必要だと思われる。

（文責：中河）

3. 先行事例調査

筆者らは、子どもラサとして活動を開始する以前の2006年から、先駆的な活動をしている講師を講演に招いたり、先進地域の視察をしたりして、先行事例の調査につとめてきた。簡単に概要を示す。

3.1 講演会の開催

3.1.1 「外国籍の子ども支援のための地域組織作り」松本一子氏

2006年12月16日（土）10時半～14時半に、富山市の環日本海交流会館で開催した。

この会では、外国籍の子ども支援に必要なネットワーク作りとそれをめぐるさまざまな事項について、松本氏が自ら関わっているNPO法人「子どもの国」の「ゆめの木教室」で行っている活動事例をまじえて、講演があった。開催地



の富山県だけでなく、福井県や石川県からも参加者があった。参加者の属性も実際に活動しているボランティア団体のメンバー、学校教師、行政関係者など、多岐にわたり、この問題への関心の高さが窺われた。富山新聞や北日本新聞など地元新聞での報道もなされた。

3.1.2 「国語科における内容重視のアプローチ」清田淳子氏

2007年2月3日(土)10時半～14時半に、富山市の環日本海交流会館で開催した。



まず、子どもの言語発達について、生活言語能力 (Basic Interpersonal Communicative Skills) と学習言語能力 (Cognitive Academic Language Proficiency) という2つの言語能力について理論の詳細な紹介があり、次に外国籍年少者の教科支援には、内容重視のアプローチが必要であること、また、子どもの母語の援用が効果的であることなどを、清田氏の実践の具体例も交えた講演があった。筆者らも含めて、これまで断片的な知識だけを持つ参加者も多く、知識を整理することができる機会となった。

3.1.3 「学びをつなぐー子どもたちの学習環境を創るー」齋藤ひろみ氏

2007年2月17日(土)10時半～14時半に、富山市の環日本海交流会館で開催した。



外国籍の子どもたちの「ことばの力の捉え方」について詳しい講義があり、その後、内容重視のアプローチでの実際の授業プランの作り方をワークショップ形式で検討した。最後に、それぞれのグループの成果をポスターで発表した。講義だけでなく、ワークショップで自らが体験でき、非常に実りある講座となった。

3.1.4 「学ぶ力を育てることばの教育」石井恵理子氏

2007年12月1日(土)10時半～14時半に、富山駅前cicビル3階で開催した。

外国籍の年少者日本語教育について、「子どもの成長を支える教育」という視点で基本的な理論の講演があり、その後、実際に外国籍年少者の支援をしている参加者らから、日頃の問題や疑問点の質問や意見交換がなされた。内容の



深い議論が実現し、有意義な会となった。

(文責：深澤)

3.2 先駆的地域への視察

3.2.1 東京都新宿区

新宿区で活動している、子どもへの学習支援教室、NPO法人「みんなのおうち」を見学した。

平成19年新宿区多文化共生実態調査報告書によると、新宿区在住の外国人の意識には定住の意向が強く、88.7%もの人が、子どもには本国と日本の両方の言語を身につけてほしいと考えている。このことから、この地域における日本語支援・母語支援のニーズが大きいことがうかがえる。

散在地域である富山とは地域の特性に違いがみられるが、学習環境を整えるために何が行われているのか、実際の指導はどのように行われているのかについて、先進地の例として報告する。

見学した教室は榎町児童センターと大久保児童館を借りて、交互に開催されている。2か所を合わせると日曜日を除く毎日、開かれていることになる。時間は、曜日によって多少ずれるが、午後7時前後から午後9時ごろまで行われている。

この教室の大きな特徴は新宿区とボランティアとが協働で開催している点である。2003年から実施されてきた区民の自主活動が母体となり、「新宿区協働事業提案制度」に基づき、「地域の力」「多様性」を活かす仕組みとして行われている。新宿区から500万円の助成を受け、2年間の計画で運営されている。ボランティアは公募され、養成講座を経た後、実践の場に入ることになっており、学生、サラリーマン、主婦や退職した教師などからなる50名ほどの支援スタッフで組織されている。

訪問した際には20名近い子ども達が参加していた。ボランティアスタッフと一緒に机をばさんで1対1で勉強している子、児童館で体を動かして遊んでいる子と様々であった。学習は学校の教科書を中心に行っている。学習のプリントが用意されていて、それに沿って進められていた。そこでは学習の指導だけでなく、子ども同士のトラブルなどに対しても一つひとつ、ボランティアスタッフが話を聞き、解決していこうとしていた。仕事を終えてから教室に駆けつけるスタッフを待ちわびる子どももいて、教室が単なる勉強だけの場ではなく、子どもの居場所にもなっているようだった。しかし、そこに至る道は平坦ではなかったようだ。勝手に走り回る子らに遊ぶ時間、勉強の時間の区別をつけさせていくことや集団生活のルール、協力の大切さを、教室での指導はもちろんのこと、キャンプ等を通じ、伝えてきたとのことである。現在も、様々な背景の子どもを理解しつつ、勉強に向かわせることに日々格闘しているとのことであった。

一方でまだまだ問題点もある。よりよい教室環境をつくろうとすればするほど、スタッフの苦労は大きいということだ。例えば、時間が夜であるため、元気のよい子どもの声などに対し、近隣住民より苦情が出る場合もあると聞く。従って、近隣住民の理解を得るためのパイプ役として、コーディネーターの存在は重要である。コーディネーターは毎日参加して、子どもとボランティアスタッフとのマッチングをし、生じる問題点を解決しつつ自らも活動しているだけに消耗も激しいようである。

また、コーディネーターの説明によると、区との協働事業は2年で終わり、その後の運営に

については具体的な支援の見通しが立っていないようだ。現在、行政が支援していることは、経済的援助、ボランティアの募集、施設の提供、広報などに過ぎない。支援ボランティアと参加している子ども達の管理他事業の運営全てをNPOが担っており、行政が教室を下から支える部分を担っていない、そして単発の事業である、地域の子ども達をどのように育てていこうとしているのかというビジョンを持っていないなどの問題点が多くある。助成金もボランティアスタッフの交通費、子どもとのレクリエーション活動等に使われ、決して潤沢とはいえない。加えて、協働という視点では、子どもを支援する異なる部署に横のつながりが乏しいことも問題点であると指摘している。しかし子ども達の状況を考えると、息の長い、ビジョンを持った事業として行われることが是非とも必要であろう。

富山県でも平成19年より射水市において、「外国籍子どもサポートプロジェクト」を進めている。その一環として平成20年6月に「多文化こどもサポートセンター」が開設された。一緒に遊んだり、宿題を手伝ったりする場所づくりを進めている。このような活動を通して、家庭、学校、地域が連携をし、行政がそれをしっかり支えるという支援の形ができていくことを望みたい。

(文責：田上)

3.2.2 リソースルーム（愛知県国際交流協会）

愛知県国際交流協会内の「あいち国際プラザ」に2003年に設立された日本語教育リソースルーム（以下、リソースルーム）の設立趣旨は、「在住外国人を支援するため、日本語教育に関わっている人たちが日本語教育に関する情報収集、情報交換、勉強会を行うなど自主的に活動を行う」である。その背景にある考えは、個人やグループ、ネットワークの持つ情報や人材そのものがリソース（資源）であり、それを幅広い人々が共有し、活用できるようにすることが、地域の外国人支援には不可欠というものである。愛知県は外国人登録者数が208,514人で、県民人口比が2.9%（2006年）であり、豊田市や豊橋市などに大規模集住地区も抱えている。外国籍年少者や成人外国人を支援する個人・グループの数も格段に多く、行政の取り組みも先進的なものがある。その先進性をそのまま富山県のような「散在地域」に採用できないことは、2. で述べた。しかしリソースルームは、その設立趣旨などからわかるように散在地域にも、いや散在地域にこそ、有意義な場所だと考えられる。これがリソースルームを今回視察した理由である。

リソースルームは、20畳ない狭いスペースだが、そこには豊富な資料（各地の日本語教室・教育委員会・学校などが作成したテキスト、日本語教室の広報チラシ、日本語教育に関する資料・報告書、在住外国人に関する資料、市販の日本語教材など）があり、活動内容は「情報提供」「資料閲覧」「ボランティアの勉強会の企画と実施」「県内日本語教室調査」と多岐にわたる。通常は、来訪者や電話への応対、資料整理、勉強会の企画が主な仕事になる。これらの仕事は、協会に登録した運営ボランティア10名余りが、2名ずつペアを組んで担当している（開室は、週2日）。運営ボランティアは、協会事務局を交えて月1回定例会をするが、毎回連絡ノートなどで密に連絡を取り、活動の改善に余念がないようだった。

運営ボランティアのAさんの話によると、最近とみに多いのが、外国籍年少者の日本語支援に関する教材や資料の閲覧希望と相談で、支援ボランティアだけでなく、学校教師や、年少者問題を研究している大学生の来訪も多いとのことであった。Aさんは、年少者支援の今

日性と、そのアドバイスの難しさを痛感すると同時に、頼りにされているうれしさも感じると筆者らに語ってくれた。またリソースルームに来ることによって、年少者支援者の人的ネットワークがさらに広がることを期待しているとのことだった。運営ボランティアには苦勞も多いだろうが、Aさんの生き生きした仕事ぶりから、リソースルームの存在が、愛知県で認知され必要とされていると感じられた。もちろん、リソースルームの円滑な運営には協会事務局の適切な助力も不可欠だろう。

今後、このようなリソースルームが、富山県に実現すればと願う。実は、富山県にも、日本語教育関係の教科書や参考書などがかなり多く所蔵されているボランティア室を持つ施設がある。筆者らは、このボランティア室をもう少し充実させて、愛知県のリソースルームのような連携を進めるためのセンターにすることができないのではないかと考えており、それを提案していきたい。またそれらが「散在地域」でどのように機能・発展するか記述・分析することは、他の散在地域へも大きく寄与するだろう。

(文責：中河)

4. 外国籍年少者の学習環境創出の方策としての支援のネットワーク構築

外国籍年少者の学習環境を整備するためには、学校の教職員や保護者、地域のボランティア、同国の外国人支援者などの支援が必要である。しかも、それらの人々が単独で支援を進めるよりも、連携を密にして実施する方が、より効果的であるということが既に報告されている。

具体的な例として、横浜いちよう小学校を挙げる。山脇ら(2005)は、全校児童の約半数を外国籍年少者が占めるいちよう小学校で、地域ボランティア、自治会や大学などとの連携が教育コミュニティの形成につながっている様子を報告している。

ただし、山脇らの実践をはじめとして、大規模集住地区での例は、大規模集住地区に支援者が入って行って支援活動を進めることがほとんどである。2.2でも述べたように、富山県には、特別な大規模集住地区に該当するような場所がない上に、支援者も広範囲に散在している。これは、先に挙げた学校や保護者、地域のボランティア、先輩外国人などが有機的に連携して活動することが難しいことを意味する。さらに、このことは、外国籍年少者の学習環境を整える際に障害になることでもある。

そこで筆者らは、散在地域に外国籍年少者の支援ネットワークを創出するために、子どもの母語による翻訳教材の作成を、各々の立場の人たちが共同で作業を進める活動を開始した。外国籍年少者に関わっている様々な人々が共に集い、共同作業を行っていくプロセスで、この問題意識が共有され深化されていくことにつながる。現在、この活動を通して、有機的な連携が少しずつだが充実しつつあると感じている。次章で、この活動の様子を具体的に記すことにする。

(文責：深澤)

5. 子どもの母語による翻訳教材作成活動

5.1 翻訳教材作成活動の意味

散在地域で外国籍年少者支援ネットワークを創出するための方法として、子どもの母語による翻訳教材を共に作成する活動を選んだのには、次の3つの理由がある。

1) 翻訳教材そのものが、外国籍年少者支援の場で必要とされるものである。外国籍年少者の学習言語を伸ばすために、外国籍年少者の母語を援用することが効果的だと知られており、すでに実践研究も発表されている（清田（2007）など）。教科書の翻訳にもいくつかの団体に取り組んでいるが、公開されているものはそれほど多くなく、全体的にその数は十分ではない。したがって、新しく作成された翻訳教材は、支援の場でもすぐに役立つものとなる。

2) 子どもの母語の翻訳教材を作成するためには、各言語の母語者、日本語ボランティア、学校関係者など、多様な人々が共同で作業をすることが必要となる。プロの翻訳者に依頼すれば、簡単に教材の翻訳そのものはできあがるかもしれない。しかし、子どもや状況に合わせ、文化差にも配慮し、日本の学校での教科学習の支援にもつながるような教材にするためには、共同作業が欠かせないのである。

3) 翻訳教材は、ウェブ上での共有が比較的簡単にできる。外国人散在地域の問題は、物や時間そして意識の共有の難しさにあるが、ウェブを利用することによって、それを部分的にでも解消できる可能性があると考えられ、この活動の発展性にもつながるものである。

以上の理由から、翻訳教材作成活動を実施し、現在も継続中である。次に、この活動の詳細を述べる。

（文責：深澤）

5.2 翻訳教材作成活動の詳細

翻訳教材作成活動の詳細を、表1に記した。

表1 翻訳活動の詳細

選択した教材	小学校検定国語教科書 光村 図書4年生下 「ごんぎつね」
翻訳言語	タガログ語, 中国語(簡体字版, 繁体字版), ポルトガル語, ロ シア語
翻訳者および 支援者, 付属ワークシ ート作成者	外国籍年少者の保護者, 地域の 日本語支援ボランティア, 留学 生, 大学教員, 小学校現職/退 職教師

まず、素材としては、国語教科書から「ごんぎつね」を選んだ。翻訳作業にあたったのは、日本語にも堪能な外国籍年少者の保護者や留学生、そして、日本語ボランティア、大学教員である。

それぞれが助け合い内容の読み合わせをしたり、日本に特有な文化などについて考えたりしながら進められた。加えて、母語の翻訳教材を子ども達に理解してもらうためには工夫が必要だろうと考え、翻訳者と支援者が協力してワークシート

も作っている。現在のところ中国語とロシア語のみが完成しているが、その内容は、翻訳文の読解の手助けや、母語独特の言葉や文化を理解してもらうことを目的とした問題である。さらには、もともとの日本語文の学習用ワークシートの必要性も感じ、現職や退職した小学校教員が協力して現在作成中である。

これらの色々な取り組みは、外国籍年少者の保護者と日本語支援者がペアを組んで行なったり、留学生には本プロジェクトのメンバーである大学教員がサポートしたりしてそれぞれに進めていたが、全体の動きを知り知恵を貸し合う機会が必要になっていった。そこで、「ごんぎつね」の翻訳作業にあたった関係者が集まり勉強会も開催した。

勉強会は、翻訳を開始した時期と翻訳がほぼ完了した時期に実施されたが、それぞれの言語

に特有な問題や、共通する問題など多くのことが話し合われた。例えば、まず「きつね」がそれぞれの国に生息するか否かが問題であった。その他の動物も生息しているか、生息していても子どもにとって身近な存在か否かで、翻訳の仕方に全く違いが出て来た。また、そもそも日本人にとって「ごんきつね」とはどんな存在なのかという話にまで至り、参加者の翻訳作業に対する興味が深まったと言える。この他、勉強会では注記のつけ方などを含め翻訳の方針など多くのことを検討した。

(文責：山崎)

5.3 翻訳教材の発信

完成した翻訳教材は、インターネット上の情報サイトに掲載した³⁾。この情報サイトは、本実践研究以前から設置していたものであるが、本プロジェクトを機に、作成した教材を掲載できるよう、内容を充実させ、発展させた。

また、情報サイトには、翻訳教材だけでなく、音読ファイルやワークシートも掲載した。この音読ファイルは、上述した勉強会において、参加者から必要だとの提案があり、作成したものである。さらに、これらの教材に関して、作成者同士や使用者からのフィードバックを得て意見交換ができるように、掲示板も設置し、活用されている。

なお、稿末に、この情報サイトの概要を画像で示した。

(文責：深澤)

6. 年少者支援現場における翻訳教材使用

6.1 望まれる実際の使用

言うまでもなく、翻訳教材の作成は外国籍等の年少者に使用されることを第一の目的としている。実際に支援の場で使用し、子ども達とのやり取りの中で生の反応を得ることが重要である。子ども達も支援者もそのやり取りの中で多くを学ぶ。そして、教材そのものが改善されたり、さらには、翻訳作成活動に携わる者達が翻訳教材のあるべき姿についてより深く考えたりするようになるだろう。子ども達の使用の現場から得られるフィードバックによってこの活動は推進され、次の教材への産出にもつながる。それらがあってこそ、この活動に参加する人たちが「達成感」を得るとも言える。

しかしながら、平成19年度の筆者らの活動では、翻訳教材をまず産出することに手一杯で、実際の使用にまで至ったのは僅か若干例にとどまった。実際の支援現場での子ども達による使用につなげることが未だ十分に出来ていないことを報告しなければならない。また、翻訳教材を使った学習方法、学習効果の分析等など、これから考察、検証されなければならない点は数多い。今後の展開を待たれたい。

(文責：山崎)

6.2 実際の使用状況

現在の段階で翻訳教材が実際の使用にまで至った若干の例のうち、1例の状況を報告したい。なお、個人情報特定できないよう再構成して記述する。

「ごんきつね」の1例

富山市のある教室の外国籍の子ども（小学校高学年，来日3年ほど）に，ある言語に訳された「ごんぎつね」を渡し，家庭で読んでもらった。担当の先生から色々な反応があったと聞いたので，その言語に翻訳した留学生とその翻訳を支援した者（筆者）が，実際に子どもの話を聞くために赴いた。

こちらから「読みましたか，どうでしたか」と聞くと，「少し難しい所もあったが全部読んだ」と言った。

そこで次に，どこが難しかったのかを聞いた。あげられた具体的な問題に対して翻訳者が説明し出すと，自然と母語の学習に入って行った。しばらく母語でのやり取りが盛んに行なわれていた。

後から翻訳者に，母語で話していた内容を聞いた。分からない所はすでに親に聞いて解決していたが，分からなかった理由を聞いたりしている内に，母国で育っている子どもなら切らない所で単語の要素を分けて誤解をしていたり，昔話にふさわしい言葉を選んで翻訳した単語が，簡単な言葉ではあるが日常的な言葉でないため分からなかったりと，翻訳者が想定しなかった問題点がいくつか出て来たようだ。翻訳者にとっては，頭で分かっているつもりであった，外国に住む状況での継承語としての母語学習，そのための翻訳のあり方を考え直したようだ。

一段落した所で，今度は筆者が日本語で，翻訳された文章が音声でも聞けたらどうかと尋ねた。（この時点では音声教材がまだ完成していなかったもので，仮定の話となった。）即座に「聞きたい」と答えてくれた。しかし，しばらくして「難しい言葉は音で聞いてもやっぱりわからない」とも答えた。音と文字の両方が必要であり，また，分からない部分を助けるための工夫も重要であることを感じた。

非常に明るく，学習意欲の高い子どもの存在にこちらの方が大いに刺激を受け，清々しい気分になれた教室訪問だった。

ここに上げられている過程こそ，子どもに教えることで教わる，生のやり取りであり，フィードバックである。ここから教材が改善されたり，翻訳作成活動に携わる者達が翻訳教材のあるべき姿を考えたり，達成感を得たりし得る。これが翻訳教材の実践の重要なプロセスであることは間違いがないだろう。

（文責：山崎）

7. おわりに

7.1 活動の成果

本活動の目的は，外国籍年少者の学習環境を創出，あるいは整備するために，いかに外国人散在地域で支援ネットワークを機能させ，充実させたらよいかを考察することであった。

今回実施した翻訳教材作成の作業の中で，外国籍年少者の保護者や日本語ボランティア，学校教師，大学教員などが，実際に翻訳の作業を共に行うことを通じて，問題意識を共有し，互いをよく知ることができた。このような活動の成果として翻訳教材が出来上がった。

通常，現在の日本社会では，日本人が支援する側，外国人が支援される側という関係性が固定化していることがほとんどであるが，この支援の連携の中では，皆それぞれの形で互いに助け合う必要があり，対等な共同作業を実現することができた⁴⁾。筆者らは，このことは，外国人散在地域で支援ネットワークを実際に機能させるために，非常に重要なことであると考えている。

さらに、翻訳教材作成という共同作業をする中で、支援のネットワークをもっと広げていきたいという意識が、プロジェクトのメンバーから出るようになってきた⁵⁾。外国人散在地域の問題は、情報や意識の共有がしにくいところにあるが、ネットワークを広げることでかなり解決がはかれることである。

このように、翻訳教材をツールにして、支援のネットワークの充実が少しずつ芽生えてきていることが観察された。

(文責：深澤)

7.2 今後の展望

外国籍年少者支援は、各地域で様々な試みがなされている。しかし、それでも、支援はまだまだ十分ではなく、不就学の外国籍児童生徒が増加していることが大きい社会問題となっている(村田2007など)。顕在化しにくい、外国人散在地域でも同じ問題が起こりつつあると思われる。その意味でも、散在地域だからこそ、支援のネットワークを機能させることが何より重要なのである。

今後も、翻訳教材作成の活動を継続し、支援ネットワークの拡大や充実のプロセスを明らかにすることで、散在地域での支援の枠組みを提示したいと考えている。

(文責：深澤)

【付記】

- 1) 本活動報告は、「平成19年度 富山第一銀行奨学財団 助成研究成果報告書「富山県における外国籍年少者の学習環境創出のための調査研究」(研究代表者：深澤のぞみ、山崎けい子、湯川純幸、中河和子、田上栄子)に、一部加筆修正したものである。
- 2) 本活動は、上記の富山第一銀行奨学財団からの助成を受けて実施したものである。また、平成18年度富山大学学長裁量経費「地域在住の外国籍年少者に対する日本語及び教科支援活動の推進」(研究代表者：深澤のぞみ、共同研究者 田上栄子・中河和子)の助成も受けた。
- 3) 本活動報告で報告した研究活動は、「平成20年度科学研究費補助金基盤研究(C)「外国籍年少者の為の学習環境デザイン：散在(非集住)地域型共生サポートの形を探る」(研究代表者：山崎けい子、共同研究者：深澤のぞみ、中河和子)において、継続中である。

【注】

- 1) これまでの「子どもラーニングサポート北陸：子どもラサ」の歩みを以下にまとめた。

2006年4月	地域日本語支援ボランティアに携わって来た者を中心に、北陸、富山の外国籍等の子ども達の問題を重要視する者達が集まり、活動の礎ができる
2006年12月16日	講演会開催「外国籍の子ども支援のための地域組織作り」松本一子氏
2007年2月3日	講演会開催「国語科における内容重視のアプローチ」清田淳子氏
2007年2月17日	講演会開催「学びをつなぐー子どもたちの学習環境を創るー」齋藤ひろみ

	氏
2007年2月	ウェブサイト「外国籍の子どもたち支援の情報サイト」を立ち上げる
2007年4月	翻訳教材作成計画を立ち上げ、準備を始める
2007年7月	「子どもラーニングサポート北陸（子どもラサ）」を集まりの正式名称とする
2007年9月	翻訳教材作成活動を開始する。
2007年10月21日	翻訳教材作成メンバーによる第1回勉強会開催
2007年11月	旧ウェブサイトから、「子どもラーニングサポート北陸（子どもラサ）」のウェブサイトにリニューアルする
2007年11月	ウェブ上に外国籍年少者向けの日本語指導に役立つリンク集を、現職小学校教師の協力により作成し、公開する
2007年12月1日	講演会開催「学ぶ力を育てることばの教育」石井恵理子氏
2007年2月24日	翻訳教材作成メンバーによる第2回勉強会開催
2008年2月	「ごんぎつね」に関する翻訳教材をウェブ上で公開し始める

- 2) 日本語を母語としない年少者は必ずしも「外国籍」とは限らない。両親のどちらかが外国人である場合は、日本国籍を持っているケースも少なくない。本稿では、それらを含めて、外国にルーツを持つ年少者と位置づけるが、紙幅の関係で、「外国籍年少者」と呼ぶことにする。
- 3) 外国籍の子どもたち支援の情報サイト「子どもラーニングサポート北陸」愛称子どもラサ <http://www.kodomo-mirai.sakura.ne.jp/kyozai-list/html>
なお、稿末に本サイトの資料を掲載した。
- 4) 5) 5.2. で述べたように、翻訳教材作成の活動参加者が集い、情報共有や意見交換のための勉強会を2回行った。6. で述べたことは、この勉強会の録音を分析して得たことである。なお、分析の内容は、深澤ら（2008）「外国人散在（非集住）地域における外国籍年少者の学習環境創出の試み」に詳しく記した。

【参考文献】

- 石井恵理子（2006）「年少者日本語教育の構築に向けてー子どもの成長を支える言語教育としてー」『日本語教育』128号，pp. 3-12
- 清田淳子（2007）『母語を活用した内容重視の教科学習支援方法の構築に向けて』ひつじ書房
- 新宿区地域文化部地域調整課（2008）『新宿区協働事業提案制度による19年度実施事業のご紹介』
- 深澤のぞみ・山崎けい子・田上栄子・中河和子（2008）「外国人散在（非集住）地域における外国籍年少者の学習環境創出の試み」（日本語教育学世界大会2008）（2008年7月に釜山外国語大学で開催の国際学会で発表予定）
- 村田鈴子（2007）「ニューカマーの子どもたちの不就学問題について」『インターカルチュラル』5号，日本国際文化学会年報，アカデミア出版会，pp. 112-125
- 山脇啓造・横浜市立いちよう小学校編（2005）『多文化共生の学校づくり 横浜市立いちよ

う小学校の挑戦』明石書店

【参考ウェブサイト】

文部科学省>「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査」 (2006年9月1日)

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/08/07062955/001/001.htm#a05

富山県>「学校基本調査」(2006年5月1日)

http://www.pref.toyama.jp/sections/1015/lib/ga_kihon/index.html

新宿区>多文化共生/外国人/国際交流>平成19年新宿区多文化共生実態調査報告書
(2008年4月28日)

<http://www.city.shinjuku.tokyo.jp/division/261000bunka/houkoku/houkoku.htm>

とやま国際センター>外国語子どもサポートプロジェクト>多文化こどもサポートセンター (2008年7月6日)

<http://www.tic-toyama.or.jp/new/supporter.pdf>

とやま国際センター>TIC刊行物>TIC NEWS 86号

<http://www.tic-toyama.or.jp/publication/86.pdf> (2008年7月6日)



図1 子どもラーニングサポート北陸のトップページ
<http://kodomo-mirai.sakura.ne.jp/>



図2 教材のひろばのページ



翻訳教材

これらの教材は自由にダウンロードしてお使いください。

ただ次の2点については是非ご協力をお願いします。

- (1) <ダウンロード時>どなたが何のために持って行かれるのかをお教えください。
- (2) <教材使用後>実際に使用してのご意見ご感想をお聞かせください。
- 連絡先: kodomo_talawiseあっとyahoo.co.jp(あっとを@に変えてください。)

これからもより良い教材を開発して行きたいと考えています。どうぞご協力ください。

小学校国語教材(光村図書 4年生下)			
ごんぎつね			
タガログ語	本文 EDE	音声 第1章、第2章、第3章 第4章、第5章、第6章	母語用ワークシート (解答・日本語訳付) -
中国語	本文 EDE(繁体字) EDE(簡体字)	音声(台湾版) 第1章、第2章、第3章 第4章、第5章、第6章 音声(本土版)	母語用ワークシート (解答・日本語訳付) -
ポルトガル語	本文 EDE	音声 第1章①、第1章②、第1章③ 第2章、第3章 第4章、第5章、第6章	母語用ワークシート (解答・日本語訳付) -
ロシア語	本文 EDE	音声 第1章、第2章、第3章 第4章、第5章、第6章	母語用ワークシート (解答・日本語訳付) -
日本語学習用 ワークシート	たたいま準備中です		
【翻訳者、翻訳支援者】 山口クリセルダ、鈴木珠子、田上栄子(タガログ語版) シーシーフェ、数橋勇(中国語版) シルビア ソフザ、菅原裕子、渡邊克江、田上栄子 (ポルトガル語版) モルチャフ・リリヤ(ロシア語版) 【録音】 山口クリセルダ(タガログ語版) シーシーフェ(中国語台湾版) シルビア ソフザ(ポルトガル語版) モルチャフ・リリヤ(ロシア語版) 【翻訳文イラスト】 柳瀬恵美		【ワークシート制作者、制作支援者】 シーシーフェ、山崎みい子(中国語版) シルビア ソフザ(ポルトガル語版) モルチャフ・リリヤ、山崎みい子(ロシア語版) 松浦和美(日本語版) 井筒博之(日本語版)	

図3 翻訳教材の掲載ページ